

令和 7 年度

# 史跡安徳大塚古墳

## 第 2 回現地説明会資料



史跡安徳大塚古墳 墳丘北側の発掘調査風景

2026. 2. 11

那珂川市教育委員会  
文化財課

## 1. 令和7年度事業の概況

国史跡安徳大塚古墳について、将来における古墳の整備・維持保全に資することを目的として令和7～9年度にかけて確認調査を実施する予定である。

令和7年度は、6月～9月初旬に古墳と周囲の灌木や竹草の伐採を行い、調査環境を整えた後に墳丘の測量調査を実施した。9月中旬から墳丘の規模、形態、構造に関する基礎的な情報を得るために、後円部南側の盗掘廃土とその周辺、北側クビレ部、前方部北西隅角に延べ18本のトレーナー（以下Trと表記する）を設置し発掘調査を実施した。Trは調査の進捗に合わせて統合したりしたため、見た目のTr数とは整合しない。

## 2. 調査の成果

### (1) 立地

安徳大塚古墳は、那珂川市大字安徳・下梶原の境界にある標高55mほどの丘陵上に築かれた古墳時代前期後半の前方後円墳で、墳丘の主軸を東西方向（N-85°-E）に向ける。古墳の周囲に繁茂する樹木等を除けば、脊振山から博多湾に向かって北流する那珂川水系の平野を広く見渡すことができる。

墳丘は東西に伸びる尾根線から北斜面寄りに築造されているため、墳丘からの視界は那珂川とこれにより形成された平野の景観を強く意識したことは明らかであろう。

また、平野から古墳を見上げると墳丘の威厳がより強調される立地といえる。

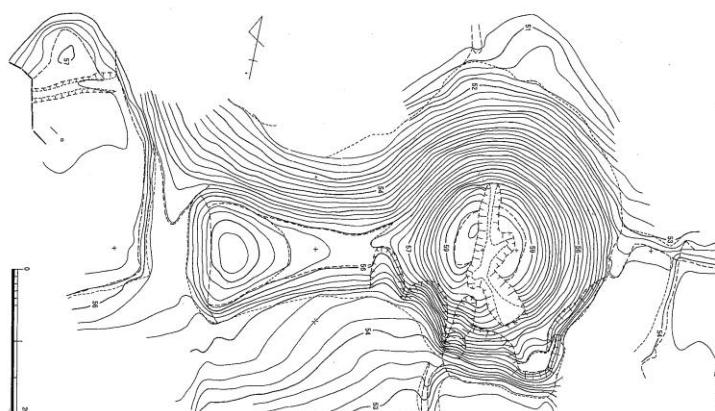
### (2) 墳丘の規模・形態

#### 測量成果

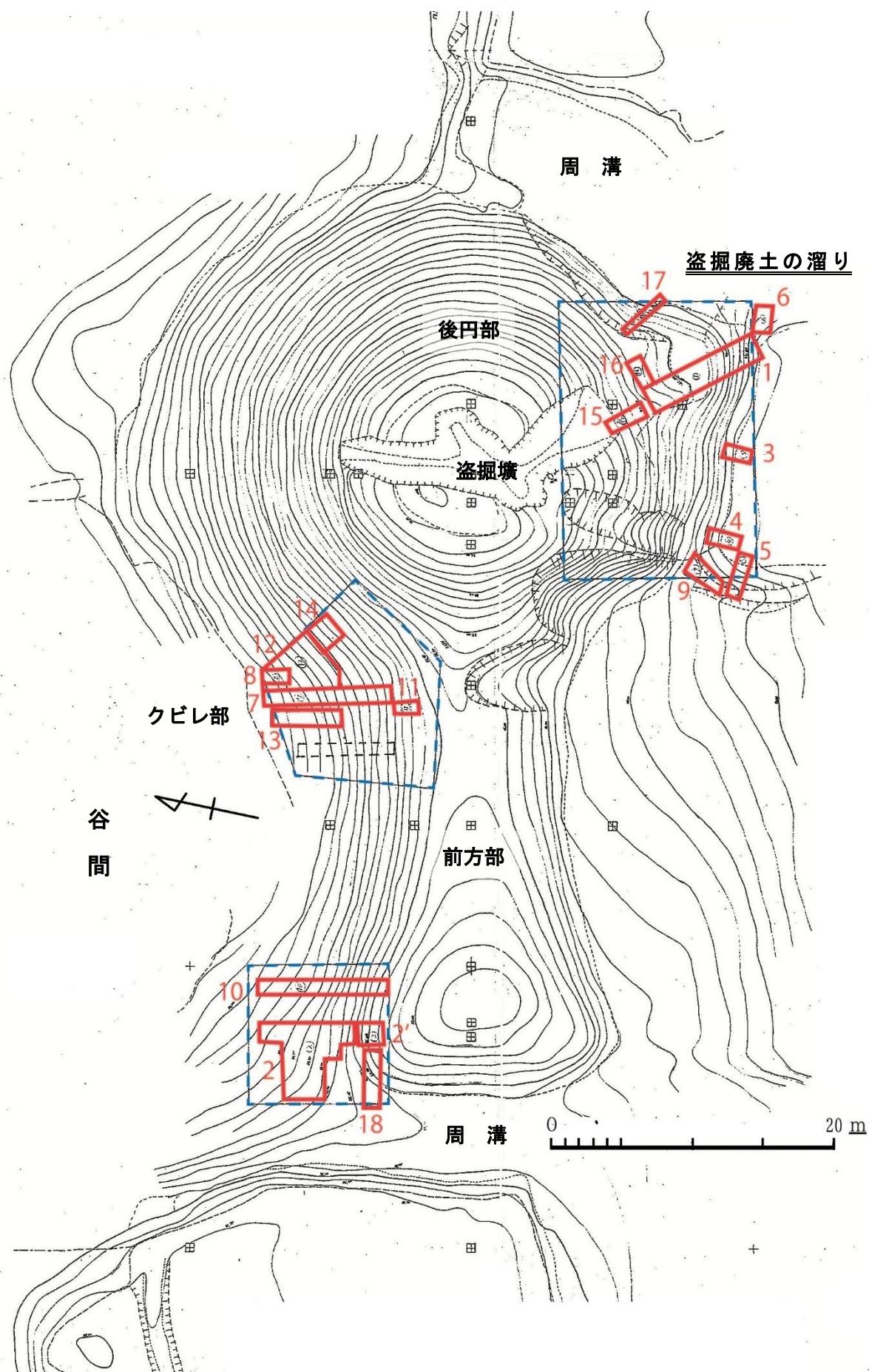
測量の結果、墳丘の現存長64m、後円部径35m、前方部長29mの計測値を得た。後円部の東裾と南裾の等高線の乱れから後世の削土等を受けた可能性も指摘されたが、墳丘の形状は概ね良好に保たれていることを再確認した。段築などの詳細は課題として残った。



安徳大塚古墳から見た福岡平野方面の眺め



安徳大塚古墳現況測量図（2025年9月30日現在）



令和7年度安徳大塚古墳調査トレンチの配置図 (赤枠はTrの位置 数字はTr番号)

## 後円部の調査

1 Tr では裾に向かって廃棄された盗掘廃土が最も深いところで高さ 2 mほど堆積していることを確認した。廃土搬出のために断面U字形の搬出路も掘削されており、その堆積状況から 2 回の盗掘が行われたと推定された。

第 1 回目の盗掘時廃土には大量の白色粘土と赤色顔料が付着する礫石が含まれていた。1971(昭和 46)年の発掘調査で後円部の中央に礫床粘土櫛の一部が検出されたことから、盗掘時に粘土櫛は徹底した盗掘を受けたことが推定された。

廃棄土の中からは副葬品は出土しなかったので盗掘の徹底ぶりがわかる。

3・4 Tr では墳丘南裾が大きく削土された痕跡が確認された。

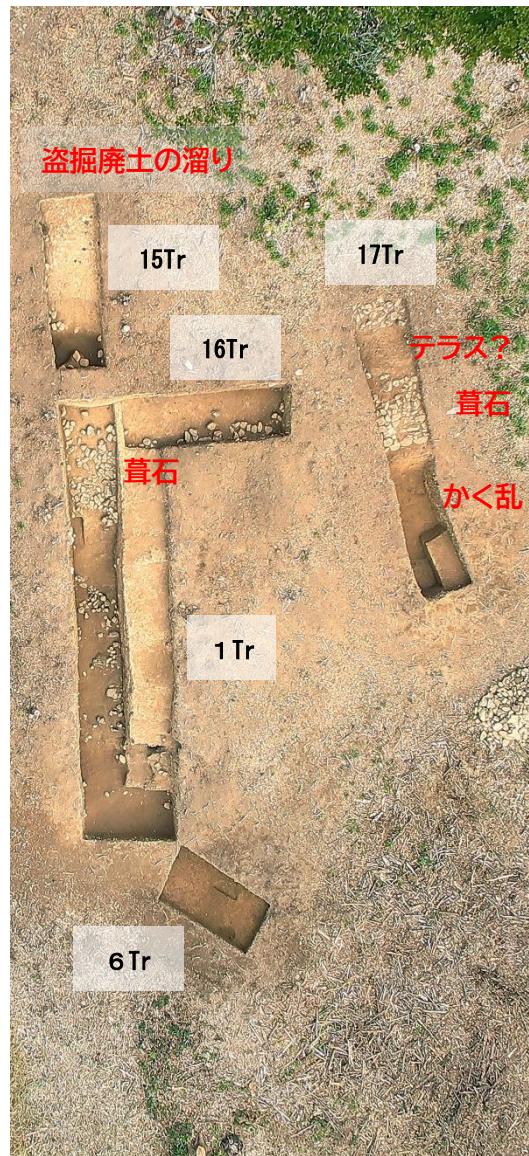
なお、5・9 Tr では地表下に埋没した墳丘裾が確認された。このことから、本来の墳丘は現状よりも 3 mほど外側に幅が広がるものとみられる。

後円部主軸方向に近い 17Tr でも、墳丘裾が削られていたこともわかった。

葺石は、1・9・17Tr で確認したが 17Tr 以外は残りが悪い。標高 55.5mあたりで葺石が途切れた緩斜面を検出し、16・17Tr でもその同様の状況がみられ段築の 2 段目テラスと考えられる。

### 右写真

1 Tr の上段で検出した葺石とその上に堆積した礫混じりの盗掘廃土(側面土層)の状況。  
背後の壁面には粘土櫛の木棺を覆っていた白色粘土が盗掘通路に溜まった状況が観察される。



後円南東部の発掘調査状況写真

盗掘路に溜まる白色粘土↓

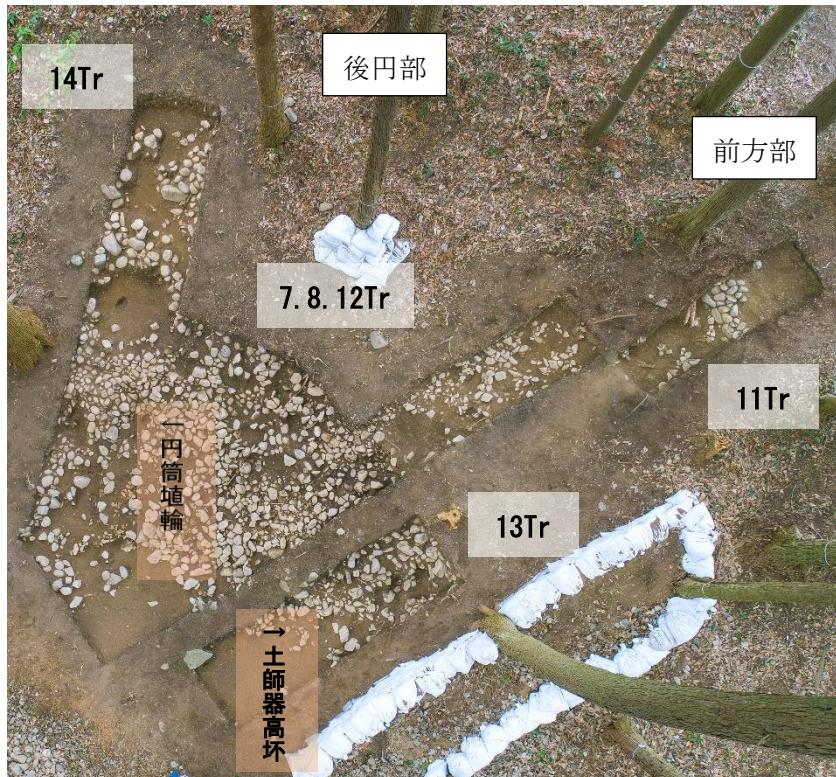


1Tr 後円南東部の発掘調査状況写真

## 北クビレ部付近の調査

左クビレ部裾では、崩落した葺石の分厚い堆積が確認された。一部に葺かれた状態の葺石面も認められるが、現状では崩落石の取り外しによる旧状の確認には時間を要する。

なお、前方部の東頂上部下に設定した11Trでは、一部で主軸に平行する葺石列を含めた良好な残存が確認された。葺石の作業ブロック区割りの葺石であった可能性もある。



左クビレ部の調査区状況

出土遺物としては後円部と前方部の境界近くから原位置を保った円筒埴輪の底部が出土した。現在のところ、この埴輪から4mほど離れた前方部側でも原位置を保った円筒埴輪が出土していることから、ある程度間隔を開けた状態で配置されたことがうかがえるが、調査範囲が狭く埴輪の配置は今後も引き続き検討したい。崩落葺石に混じって壺形埴輪、土師器高坏片も出土したがいずれも小片であった。



12Tr 左クビレ部の円筒埴輪底部の出土状況



13Tr 土師器高坏片出土状況

## 前方部左隅角付近の調査

墳丘の裾の傾斜がゆるやかなため、墳丘裾の特定が難しく、また、斜面には原位置を保った葺石が皆無に等しく、積極的に段築と判断できる箇所も少ない。

しかし、墳裾に崩落した葺石の溜りが認められることから、これを頼りに墳裾の絞り込みを行うこととした。

段築について、18Tr では幅 50cm ほどの緩斜面が認められこれが 2 段目の段築テラス面の可能性があるものの、2、10Tr では根の攪乱などで不明確になっており引き続き他 Tr での確認が必要である。

葺石は後円部やクビレ部と比較すると小振りで出土量も少なく、埴輪、土器片の出土量も少なかった。

### 3. 出土遺物

各 Tr から円筒埴輪、壺形（朝顔形？）埴輪、古式土師器甕片・高坏片他などが出土したが、大半は Tr 上方からの流れ込みとみられ、小片化し表面調整も摩耗しており該当部位の特定も難しいものも多い。

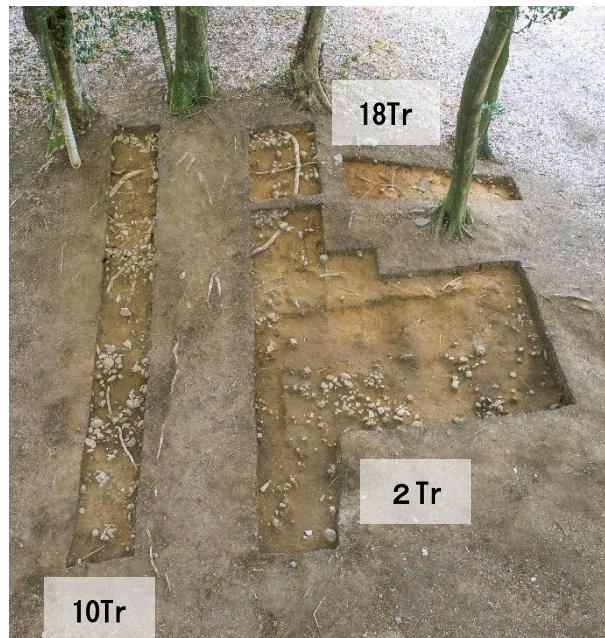
クビレ部から埴輪基底部が原位置を保った状態で出土しており、使用状態が把握できる出土例が少ない古墳時代前期後半の円筒埴輪例としても貴重である。

1Tr では粘土櫛を構成していた白色粘土とともに丹塗り壺形埴輪片が出土した。墳頂に配置されたものが盗掘の際に廃土とともに廃棄された可能性がある。

5・9Tr では裾の葺石堆積層から円筒埴輪片が出土しており、後円部の墳丘テラスないしは斜面に並べられた可能性がある。

13Tr の裾付近で土師器高坏の脚柱部が出土したものとの脚裾部や坏部は未確認である。墳丘上に配されていたものが転落したか。

**円筒埴輪** 12Tr で検出した円筒埴輪は基底部径が 20 cm ほどの小型品である。出土片は器壁が薄いタイプのものが多く見受けられる。1 次調査では基底部から外に大きく広が

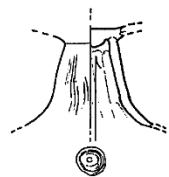


前方部左裾における調査区の設定状況



崩落した葺石から想定される前方部の裾

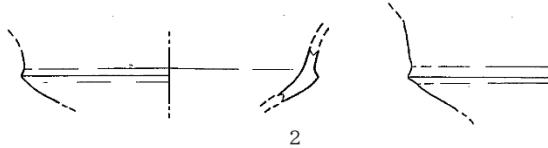
土師器



1

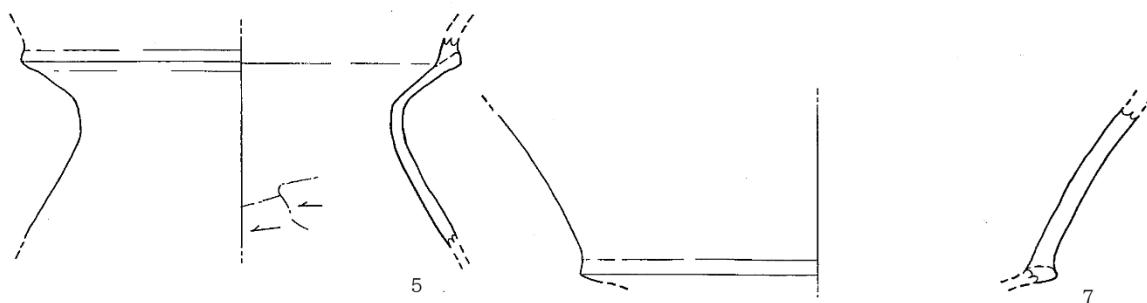


壺形埴輪



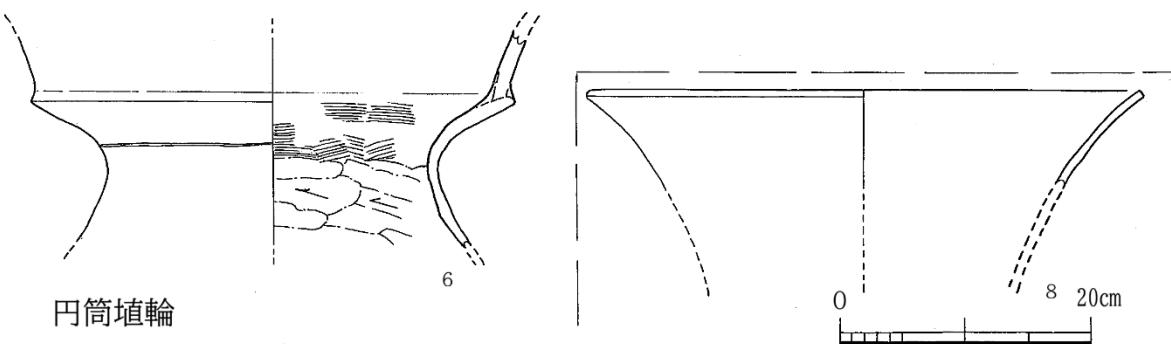
3

4



5

7

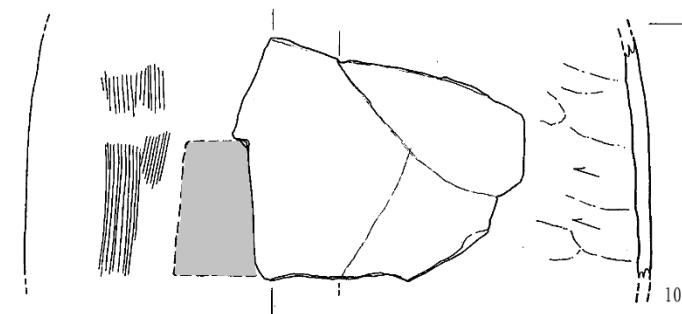


6

0

20cm

円筒埴輪



10



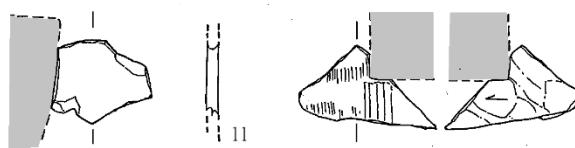
15



9



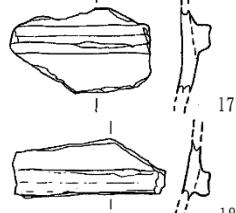
丹塗り



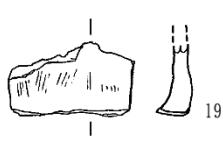
11



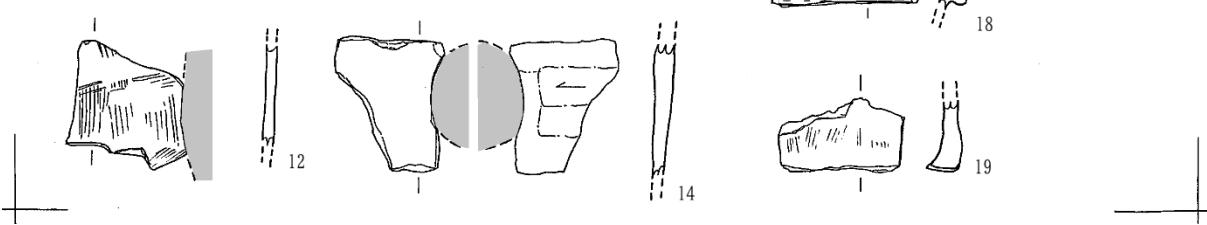
13



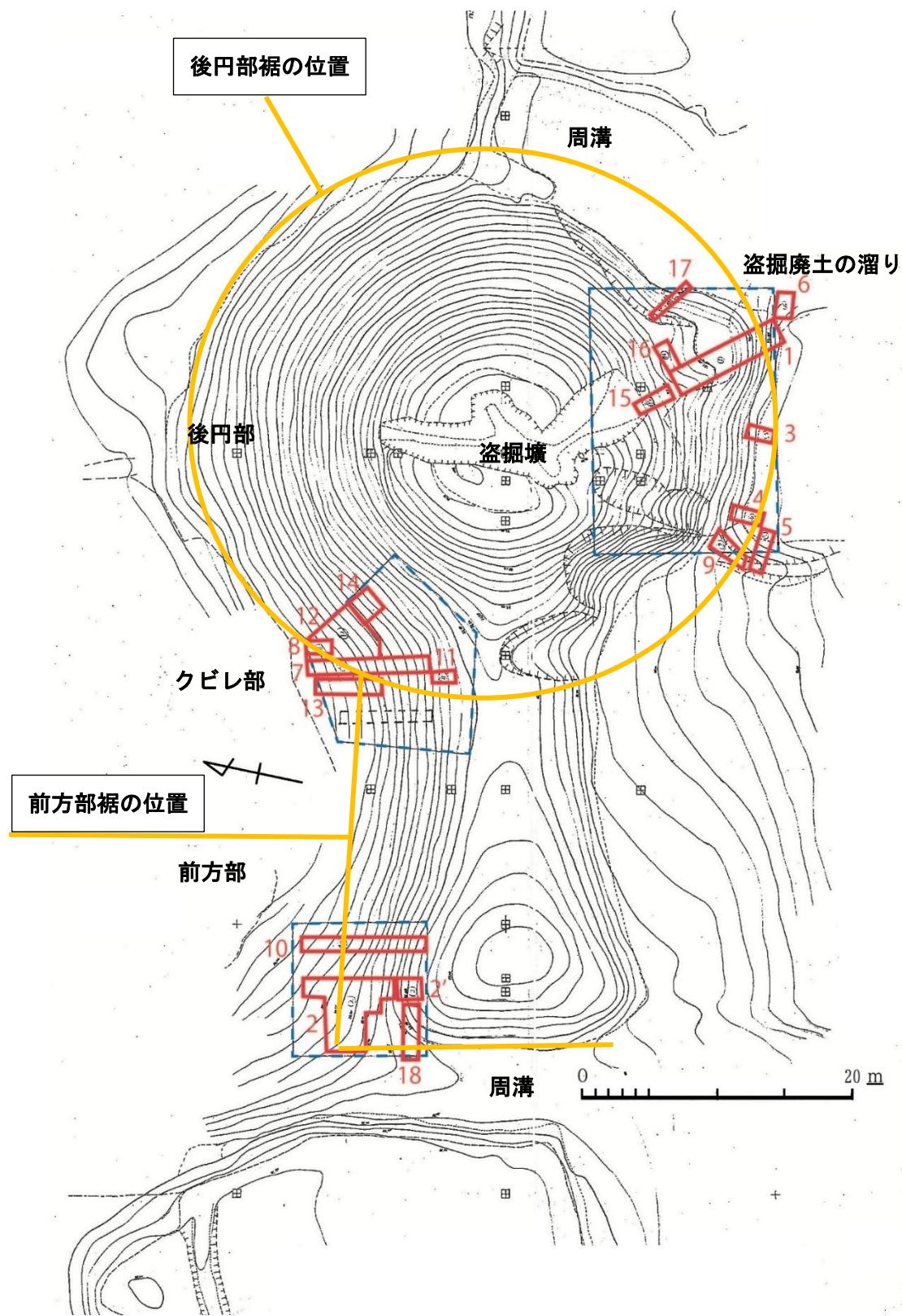
17



19



7



安徳大塚古墳 調査トレンチの位置と墳丘裾の推定ライン

る大型品も出土している。口縁部の形態は先端が如意状に捻り出されたものが確認されている。突帯はいずれも高めで先端が外向きに軽くつまみ出されたものが多い。透かし孔が認められる破片もあり、方形あるいは逆三角形のような直線的な透かし痕跡が観察される。外面はタテハケ、内面は横ケズリ・ナデ調整が残る。

#### 4. まとめ

##### 墳丘の形状

現況では墳丘現長 64m、後円部幅 35m とされているが、後円部裾は特に東部から南回りにクビレ部に向けて墳丘斜面から裾にかけて土取りなどによる地形改変を受けたことが明らかになり、これにより墳丘の形状規模について今後の調査結果をみて再検討を要する可能性がある。具体的に後円径は 3 m ほど拡大し全長が 67m 前後となることが予測され、さらに前方部の南裾も地中下に埋没しており北に拡がる可能性もあり墳形の見直しが求められる。

墳丘が丘陵の北斜面に接して築かれていることが判明したことから、北側墳裾も南に比べてより下方に設定されたのであれば左右比対称の墳形も予想される。

後円部では段築とみられるテラス状の緩斜面が数か所で確認されている。以後の調査成果と合わせることで立面構造についての検討も可能となる。

葺石については、墳丘斜面での崩落が進んでいることが明らかになった。基底部に配された根石を確認できたのは 17Tr だけだったことから、そもそも葺石の積み上げ方に問題があったのか、また、当該墳では貼り石、積み石など葺石の構築工法が施工箇所などによって使い分けられていたのかなど、多くの課題も出てきた。

##### 葺石

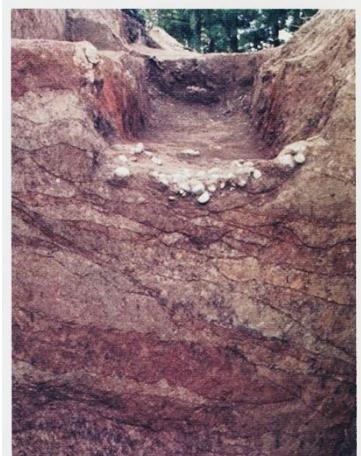
葺石に使用された礫は花崗岩が多くを占めている。古墳の背後に控える脊振山系は花崗岩を基盤層としており、那珂川の河川敷では容易に採集できる。葺石には川原石と思われる表面が丸みを帯びた石材も多くその採集地についても興味深い。さらなる詳細について検討を進める必要がある。

##### 礫床粘土櫛

第 1 次調査で確認された盗掘壙について、後円部中央の礫床粘土櫛は盗掘により大きく損壊していたが、今回の調査では、盗掘廃土の廃棄状況などから少なくとも 2 度に



12Tr の葺石検出状況



1971 年に検出された  
礫床粘土櫛の状況

わたる大規模な盗掘が行われたことが明らかとなった。

廃土からは大量の白色粘土が検出されるとともに、礫床石材には赤色顔料の塗布が顕著に認められた。廃土からは陶磁器片などが出土しており盗掘の時期が鎌倉時代以後であったことをうかがわせる。礫に付着した赤色顔料の主成分は目視ではベンガラの可能性が高いと考えられるが、自然科学分析などで詳細を明らかにしていきたい。

### 遺物

調査区の埋土から土器が出土しているが、多くは円筒埴輪、壺形埴輪片であった。

福岡平野と周辺における初期の円筒埴輪例として老司古墳(福岡市南区)、元岡池ノ浦古墳(福岡市西区)、三雲築山古墳(糸島市)などが知られ、いずれも古墳時代前期後半(4世紀中～後半)である。元岡池ノ浦古墳出土埴輪では三角形の透し孔が認められるなど本墳出土埴輪との類似点が認められるが、全体がわかる良好な資料がなくこれらを補う福岡地域の初期円筒埴輪資料となる可能性がある。

本墳からは壺形埴輪も多く出土しており、単口縁、二重口縁壺、丹塗りの有無、法量も大・中・小と多様であることが分かった。現時点では残存状況が良好な資料が少ないが詳細のわかる今後の新たな資料の出土に期待がかかる。

玄海灘沿岸地域を中心とする北部九州では、前期古墳では壺形埴輪が円筒埴輪に先行して出現していることが知られる。那珂川中流域では古墳時代前期の首長墳として、エゲ古墳、妙法寺2号墳以後に卯内尺古墳(壺形埴輪のみ)→老司古墳(壺形埴輪+円筒埴輪+家形埴輪)へと変遷することが知られているが、かねてより両古墳の間に築かれたと考えられていた安徳大塚古墳の再評価とともに、那珂川中流域地域の歴史的位置づけについて、各古墳の立地変化、墳丘規模・形態の変遷、出土遺物の比較、さらにこれらを取り巻く集落の様相など多様な観点からの検討が必要である。

**※本紙で報告した所見は本年度発掘調査成果をもとにした速報であり、今後調査の進捗により隨時変更をかけていくことをご承知おき下さい。**

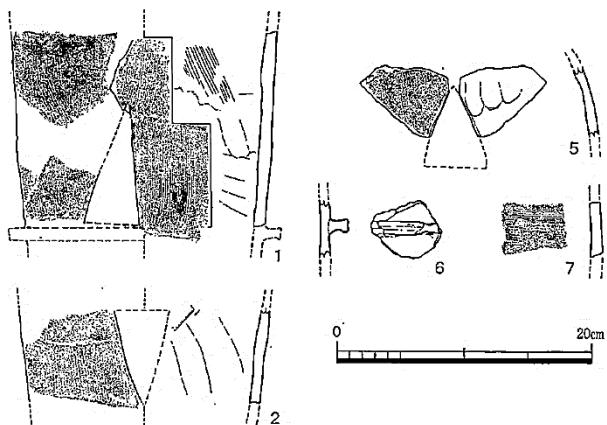
### 問い合わせ先

那珂川市教育委員会 教育部 文化財課

〒819-1241

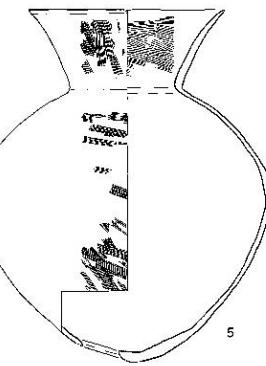
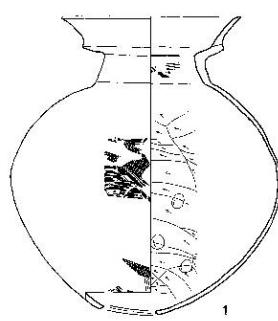
福岡県那珂川市後野1-5-1

TEL092-952-2092

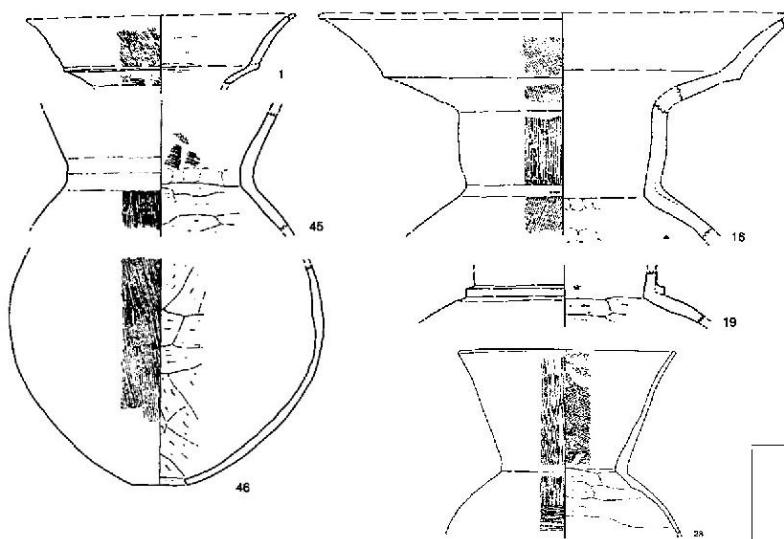


元岡池ノ浦古墳出土円筒埴輪実測図 (1/6)

焼ノ峠古墳出土壺形埴輪

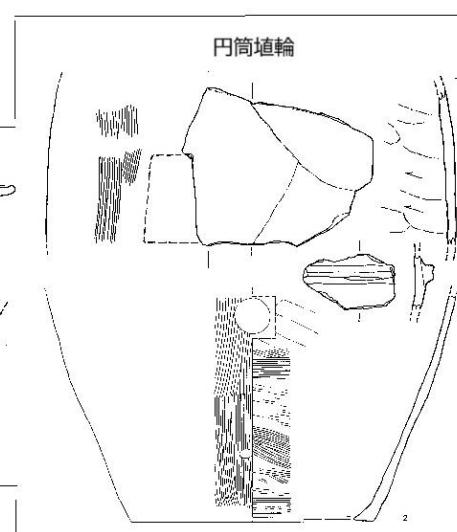
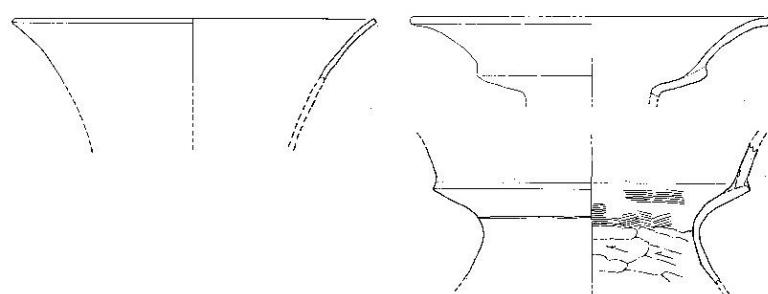


卯内尺古墳出土壺形埴輪

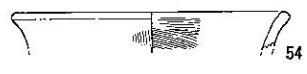
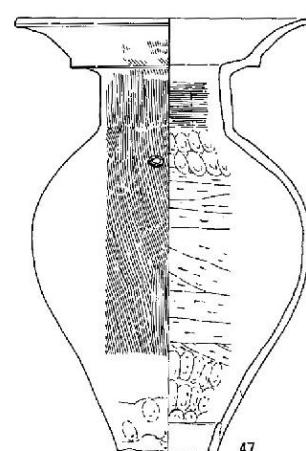
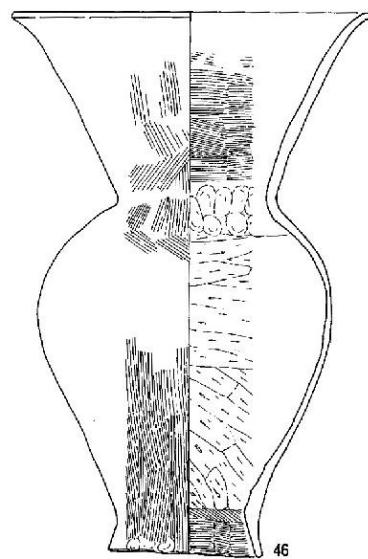


円筒埴輪

安徳大塚古墳出土埴輪

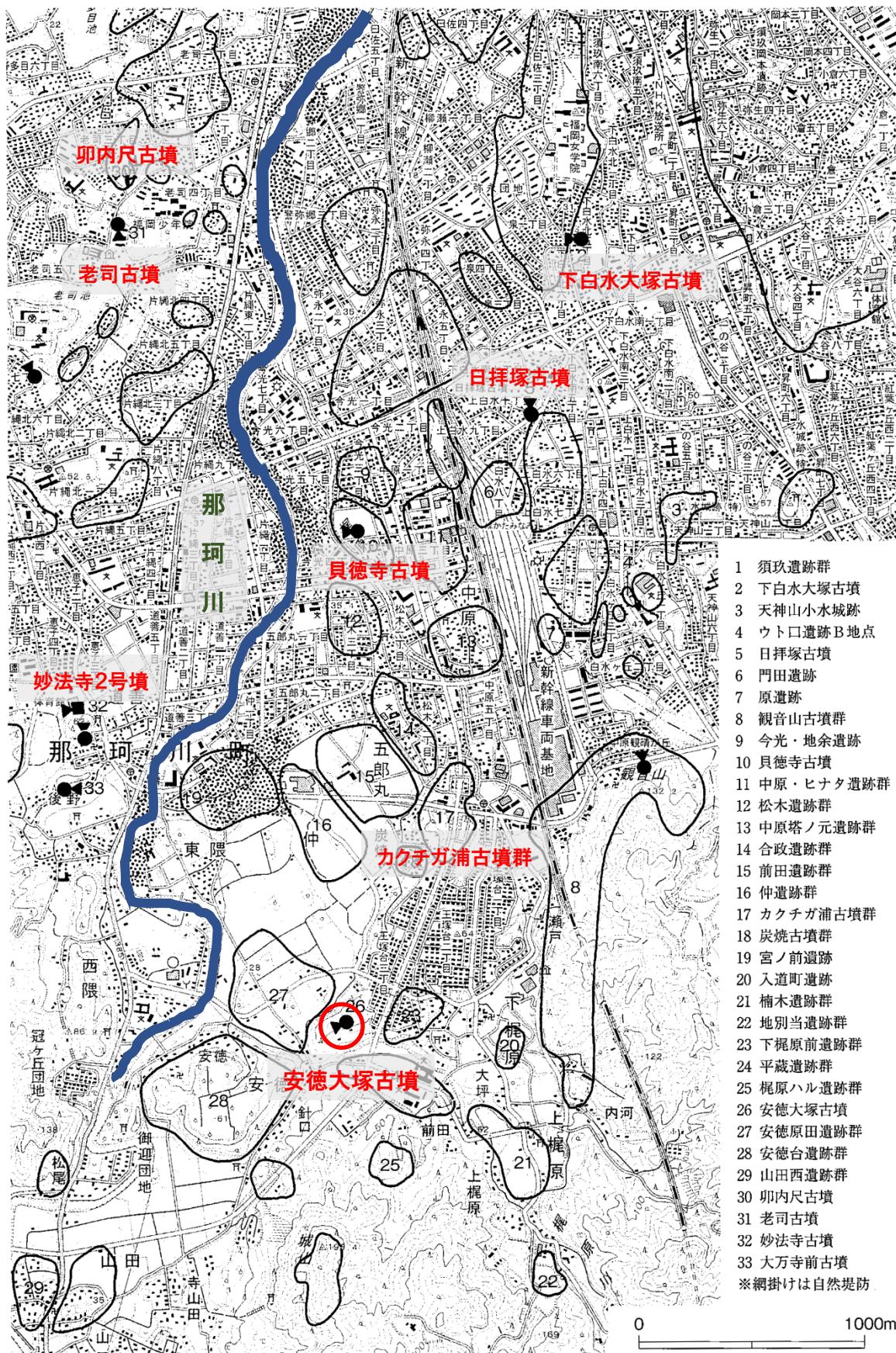


老司古墳出土埴輪



0 20 cm

福岡平野と周辺の古墳時代前期の主な壺形埴輪と円筒埴輪 (1/6)



那珂川中流域の主要古墳と集落遺跡の分布